体験記

がんになっても働き続けられるように

40代　女性　乳がん

43歳の時、乳がんと告知されました。それはまさに青天の霹靂で、毎年検診を受けていたのになぜ私が？と戸惑いと不安でいっぱいになりました。仕事中でも、ふと「がんになった」ことを思い出すと涙がこぼれることもありました。

当時、私は総務部の契約社員で、ネットには「がんを理由に会社を辞めた」「退職をすすめられた」という体験談が多く、私も契約更新してもらえないのではないかと不安はさらに大きくなりました。それでも「治療と仕事を両立してみせる」と心に誓い、手術・入院で１か月余り休んだ後、職場に復帰しました。

復帰後は抗がん剤や放射線治療を続けながら働きました。副作用に苦しむこともありましたが、コロナ禍で出勤が隔日となり体を休められたことや、上司や同僚の配慮のおかげで治療を続けることができました。心配していた契約更新についても、むしろ正社員に登用され、会社に必要とされていると実感できたことは大きな支えでした。

印象に残っているのは、復帰後に社長から「がんの方に対する制度が整っていなくてすみません。何かあればどんどん提案してください」と声をかけてもらったことです。その後、私は「治療休暇制度」や「会社による三大疾病保険加入制度」を提案し、実際に導入されました。今では多くの社員が利用し、治療と就労を両立しています。

現在も再発予防の治療を続けていますが、制度が整ったことで将来への不安は和らいでいます。がんになっても働き続けることは不可能ではありません。大切なのは一人で抱え込まず、周囲に思いを伝えること、そして、その勇気が治療と仕事の両立を続ける力に繋がっていくのではないかと感じています。

体験記

セカンドオピニオンで納得して治療をスタート

60代　女性　卵巣がん

2015年に卵巣がんの手術と抗がん剤治療を受けました。2018年に再発が判明し、主治医に「抗がん剤治療を始めましょう。」と言われましたが、私は「どうしても手術で腫瘍を切除したいので、セカンドオピニオンを受けたい。」と希望を伝えました。主治医は「抗がん剤治療しかないのだが、それなら、院内の腫瘍内科でセカンドオピニオンを受けてみる？」と話を進めてくださいました。

院内の腫瘍内科医の意見は「私も抗がん剤治療が一番よいと思いますが、別の先生にお話を聞いた方が納得できる場合もありますよね。聞きたい先生のセカンドオピニオンを受けてみては？」というものでした。それを主治医に話して、私の希望する大学病院の婦人科医宛に情報提供書を用意いただきました。私は心を躍らせて、セカンドオピニオンを受けに行きました。

セカンドオピニオンの結果は「手術が困難な場所に腫瘍があるし、初発の時に抗がん剤が効いているから、今回は抗がん剤治療を受けるのがベストです。」というものでしたので、その場で主治医に電話し、「予定通り抗がん剤治療を受けます。」と宣言しました。

少し遠回りしましたが、自分のできる限りのことをやったことで、納得して再発治療を開始でき、抗がん剤全クールを乗り切ることができた気がします。セカンドオピニオンを受け、自分で治療を選択できて、本当によかったと思っています。

体験記

ストーマと共に暮らす

50代　男性　直腸がん

2010年9月に直腸内側粘膜に12mmのポリープが見つかり、検査の結果、直腸がんと診断されました。翌年2月に直腸の全摘出と肛門温存を目的とした手術を行い、回腸にストーマを造設しました。

退院後は、妻のサポートを受けながらストーマの装具交換を行っていました。その後、ストーマを閉じ仕事へ復帰をしましたが、吻合部より菌が入り込んだため肛門周囲膿瘍になり、横行結腸に再びストーマを造設することになりました。1年半程、肛門周囲膿瘍の治療を行いストーマを閉じましたが、肛門周囲膿瘍が再発し、最後はS字結腸にストーマを造設し今に至ります。妻のサポートを受けながら行っていた装具の交換は、S字結腸にストーマを造設した時点で1人で可能となりました。

直腸がん手術から3年間で入退院を12回、手術は肛門も含め11回行っています。この間は仕事に集中することは不可能でしたが、幸いがんの転移もなく抗がん剤治療も行わず、仕事復帰を果たしました。しかしながら、ストーマに関する事は情報がなく、不安な生活を送っていたのです。

そんな時、公共施設に置いてあったチラシでオストミー協会の存在を知りました。社会適応訓練講習会に出席して情報を得たり、様々な人から体験をお聞きし大変参考になりました。オストミー協会の皆さんには「ストーマと共に楽しく暮らす」ということを教えて頂きました。